

青年期以降の移行対象
——アニミズム的思考と対人様式との関連から——

王 怡 今

青年期以降の移行対象

——アニミズム的思考と対人様式との関連から——

王 怡 今

1. 問題

移行対象 (transitional object) という言葉はウィニコット (Winnicott, D. W.) が提唱した「乳幼児が特別の愛着を寄せる, “自分ではない” 最初の所有物」という概念 (Winnicott, 1953) であり, 例えばタオルや毛布, あるいはテディベアなどがその典型である。乳幼児はそれを肌身離さず持ち歩き, それがないと著しく不安を感じるものである。この現象は単に子どもがものに対して執着するという意味だけではなく, 子どもの情緒発達過程を促進する役割をもち, 母親の不在による不安に対処するために所持し, 母親との愛着を内在化していくという, 分離と自立を表す現象として臨床においては重要な概念である。

ウィニコット (1953) によると, 幼児は母親と一体となっている状態から少しずつ分離し, 母親は自分の外にあって自分ではない他の何かであるという状態へと移行していく。その上で移行対象はその中間領域にあり, 心的な幻想世界と現実の外的世界の中間領域で遊ぶことを通して自他の境界が明確となり, 子どもの現実世界への移行を促すと述べている。そして, それは乳幼児が特定なものに対して愛着を示す現象でもある。日本においても, 児童心理学を専門としている西山哲治 (1981) は人形の持つ教育価値に注目し, 帝国小学校で校長として在籍していた際, 毎年人形供養を行い, 人形病院も創

立している。また, 子どもたちが人形に対しての愛着を「かあさま, 私のかあい, 人形がきのふからどうしたことか手をいため痛い」と泣きまする。まあかあいそにかあいそにそれでは人形病院に入院させてなほすやう早くお願なさいませ。あらうれしいのうれしいのあんな手なしの人形がけふは私にだつこしてにつこと笑つて居ります (譜は国定教科書の「私の人形はよい人形の譜」)」という曲で表現した。子どもたちはこうした移行対象を使用し, ファンタジーの世界で遊ぶことを通して, 外的な世界へとつながっていく。移行対象は「中間領域」の役割を担い, 子どもたちの発達段階において極めて重要な機能を果たすものになる。

ウィニコット (1953) は, 移行対象は年を経るにつれて拡散し, 形を変えていくと指摘している。このことについて井原ら (2006) は, 乳幼児が所持する移行対象とそれ以降の拡散した対象とは, 本質的に同様の「自らを慰める要素」を含むが, その形態や所持の仕方, 使用の仕方は異なると言及した。つまり, 移行対象は成長につれて, 慰めの要素を保ちつつも, 使用状況などは多様に変化していくものである。しかし, 思春期になっても同じ移行対象を持ち続ける人がある (Shafii, 1986; 森定, 1999; 森定, 2001; Arthern et al, 2002; 信田, 2008; Erkolath et al, 2009)。こうした人たちは成長過程において, 移行対象の必要性を感じ続け, 移行対象から卒業することができなかつたと考えられる。井原ら (2006) によると, 移行対象

* 臨床心理学研究科 博士課程 (後期)

の機能について、移行対象とのかかわりが現実的な対人関係のシミュレーションとなっているとしている。つまり、それは幼児期に移行対象との関わりの中で現実的な世界に適応していく過程と類似している点があると考えられる。

2. 移行対象に関する研究

ウィニコットが1953年に「移行対象と移行現象」という論文を発表してから、移行対象という概念が徐々に世界に広まり、彼の最も重要な理論の一つとして認識され、対象関係論における一つの常識として考えられるようになった。ウィニコットは移行対象について様々な現れ方があると考えたため、狭義的な定義を定めることをしなかった。

しかし、移行対象に関する実証的研究を行う際に、明確な基準を決めなければならないため、Gaddini & Gaddini (1970) は、手や指といった乳幼児自身の身体の一部や母親の身体の一部、おしゃぶり、哺乳瓶等を移行対象から除外し、これらを移行対象と区別するために“先駆物”と名づけている。現在では、指しゃぶりやおしゃぶりを含むものを移行対象から除外して考えることが一般的である。Hong (1978) は従来の研究において用いられた移行対象の基準を整理し、先駆物を含む移行対象をその種類と愛着の発生時期から、“移行対象等価物”、“一次的移行対象”、“二次的移行対象”の3つに分類した。“移行対象等価物”とは先の先駆物に該当するものを指す。その他、一次的移行対象とは二次的移行対象より発達の初期に現れ、主に生後6ヶ月から愛着が寄せられる対象を指し、タオルや毛布類などを「一次的移行対象」の代表とした。また、主に2～3歳頃に愛着が向けられ、人形やぬいぐるみなど遊びの要素が強いものは「二次的移行対象」に該当する。

2.1 移行対象の出現に関する研究

移行対象に関して最初の実証的研究を行ったのはStevenson (1954) であり、彼女はウィニ

コットの助言を受け、43人の子どもを対象に研究した結果、そのうち33人の子どもが移行対象を持つことを見出している。遠藤 (1989) は欧米圏あるいはアングロサクソン圏のデータをあげ、英国79%、スウェーデン74.8%、米国67.5%、ニュージーランド都市部90.1%など、いずれも高率であることを報告している。また、井原 (1986) が欧米圏の6つの研究結果を平均し、66%という高い出現率を算出した。Shafii (1986) は230名の思春期の男女を対象に調査を行ったところ、182名がある期間中に移行対象を使用したと言及し、80%の出現率が出された。これらの結果から、欧米圏では移行対象は決して珍しい現象ではなく、現実には大半の子どもが経験するものというウィニコットの主張を支持する結果となった。

しかし、異文化間で比較調査を行った研究は、以上の高い出現率とは異なって、農村部は都市型の文化圏より出現率が低いという結果が出た (Gaddini, 1970; Hong, 1976)。また、アジアにおける移行対象の出現率は低く、韓国では18.0% (Hong, 1976)、中国の移行対象出現率はわずか16.5%であることがわかった (井原, 1997)。この結果に対して、Hong (1976) は異文化における就寝時の環境、就寝時の様子、母乳保育、身体接触というような要因が関連していると指摘した。Hongの指摘を考慮するならば、西洋文化においては乳幼児を早い時期に自立させるという育児態度があり、乳幼児は母親と心理的・身体的に早く離れて、自己を確立しなければならない環境に置かれるために、移行対象を創造し、使用することによって、外界の現実環境に適応していくことができると考えられる。それに対し、母親との接触が多く行われる地域、特に、アジアの国においては、子どもの移行対象の必要性が相対的に低くなる結果になることが考えられる。

2.2 日本における移行対象の研究

日本における移行対象の初期研究は出現と生育要因との関連が多く検討された。藤井(1985)

は日本で最初に移行対象の調査を行い、保育園の子どもを対象に出現率と母子関係のパターンを年齢別に分けて検討した。その中で31.1%という移行対象の出現率を見出し、移行対象の有無は母子関係の心理的密着度と関連すると考察している。

遠藤（1990）は移行対象の出現と母性的関わりとの関連について調査を行い、授乳様式、就寝様式など養育行動の違いからアプローチし、その結果38.0%の発現率を見出した。井原（1997）が移行対象の出現率を日本と中国で異文化比較の調査を行った結果、日本の出現率は31.7%であるのに対し、中国は僅か16.5%であった。その原因は、中国がより素朴な子育てをする子育て文化に近いからと考察している。

黒川（1999）は乳幼児の母親との就寝様式、就寝前の行動について調査を行い、32.0%の出現率を報告している。駒田ら（2001）は移行対象の出現と愛着の発達について検討し、母親との分離場面に関する内的作業モデル（幼児・児童絵画統覚検査：CAT）を用いて愛着関係を測定し、31.3%の出現率であることがわかった。池内・藤原（2004）は移行対象の出現と生育環境要因との関連に焦点をあてて考察し、39.8%の出現率を見出した。富田（2007）が3～6歳の子どもを持つ保護者261名に質問紙調査を行った結果、移行対象の出現率が31%であることがわかった。中でも子供の出生順位や兄弟構成ごとの出現率をあげ、母親とのかかわりにより移行対象の出現に影響する要因を検討した。また、保護者が子どもの移行対象に対しての態度を自由記述で詳細に紹介している。

以上の先行研究から、日本における移行対象に関する調査の多くはHongの影響をうけ、生育環境要因を踏まえて出現率を検討した。その結果、平均して30%の出現率であることがわかっている。しかし、森定（1999）は思春期を対象に移行対象の出現を調査したところ62%の高い出現率があることがわかっており、信田（2009）が大学生に移行対象の経験について調べた結果85.5%の人が経験したことを報告

している。清水（2012）は私立大学の学生に調査を行い、45.6%の出現率があり、それらいずれも既存研究より高い発現率であった。よって、移行対象の出現率を再検討する必要があると思われる。

一方、移行対象の消失時期については、まだ研究が少ない。Shafii（1986）は中学生233人に移行対象について調査を行い、14歳の時点で女子21%、男子13%が移行対象を持ち続けていたことを見出している。森定（1999）は343名の大学生に移行対象を回顧的に思い出してもらい、出現率を調査したところ、思春期以降も所持し続ける人がいると指摘している。また、信田（2009）は255名の大学生に調査した結果15.6%の人がまだ移行対象から卒業できていないことを報告している。以上から、移行対象は児童期を過ぎても持ち続ける人がいることがわかり、移行対象は幼少期に限定して現れる現象ではないと考えることができる。

3. 内的作業モデル (IWM) とアニミズム

3.1 青年期と内的作業モデル

藤村ら（2000）は「青年期は混乱と動揺を経て自己の再構成に向かう時期」とし、親から自立して「アイデンティティを確立」（遠藤，2000）に向けた、さまざまな課題を乗り越えなければならない時期としている。その中で親から心理的離乳を経験し、親子関係、友人関係が大きく変化し、今まで心の支えとしてきた愛着対象との関係が質的に変化していく。そうした変動が大きい時期である青年期にある人は内的な混乱を起こしやすく、強迫神経症、不登校、対人恐怖、アパシー、拒食症などが起こりやすい（笠原，1976）。従って、この時期においては特に心理的安定性を保ち外的環境に適応していくために、新たに愛着対象を再構築し、心に収めていく作業が求められる。

戸田（1988）によると、他者と自己の関係に関する心的表象を内的作業モデルといい、この表象は、発達に伴って愛着対象との間での愛着

に関連した出来事を要素として個人の内部に体制化されていき、現実世界のシミュレーションモデルとして使用され、外界からの情報を処理したり、安全感を得たりすることで有効な行動プランを立てていくという。このように、乳幼児期に形成された愛着は次第に内在化されて内的ワーキングモデルとして存在し続けると考えられ、このモデルは生涯にわたって調節をしながら対人的な相互作用において存在する。本研究では、内的作業モデル尺度を用いて青年期以降も移行対象を持ち続ける人と、そうではない人との違いを測定し、移行対象の有無が愛着スタイルに影響しているのかを比較検討する。

3.2 内的作業モデル (IWM) と移行対象

移行対象は「ほどよい母親」と乳児の間に生まれる産物 (ウニコット, 1964) である。乳幼児期に移行対象を経験した人は母親とよい関係を築いた経験があるため、安定した愛着関係を内在化できている。また、この愛着関係はその後の対人関係の基礎となっていると考えられるため、青年期において移行対象を経験した人は経験しなかった人より対人関係の変化に適応しやすく、安定した愛着スタイルを持つと考えられる。また、青年期以降も移行対象を持ち続ける人は、こうした移行対象という中間領域の世界で擬似的な対人関係の体験をすることで現実的な対人関係のシミュレーションとしていると考えられる (井原ら, 2006)。

Horton (1981) は、毛布、ぬいぐるみ、想像上の仲間、おとぎ話、ペット、音楽などの慰めの媒体は生涯を通じて精神的、身体的苦痛を和らげると言及している。青年期は子どもから大人へと成長していく大切な段階であり、様々な内的危機や人間関係の変化を体験し、新しい価値観を形成していく。そうした中で挫折やストレスという外的現実遭遇するが、内的安定性を保つために中間領域として移行対象を使用し、休憩する場所として存続していると考えられる。青年期以降の移行対象は新たな大人の社会という段階への移行の中で、外界との関係を

新たに構成していくことを支える存在としての役割を果たしていると考えられる。

3.3 アニミズムと移行対象

霊魂という観念を抱いて、人文科学で解明しようとして、アニミズムという概念を提唱したのは「イギリス人類学の父」タイラー (Tylor, E. B.) であった (久保田, 2008)。彼によると、アニミズムの定義は「霊的存在 (複数) への信仰」であった。彼は霊魂の発生論について多く語り、この霊魂観念は人間だけではなく、あらゆる生物と無生物の範囲にまで及ぼされる。すなわち精霊 (spirit) 観念が生まれた (小幡, 2003)。

その後、心理学の分野でピアジェ (Piaget, J.) はアニミズムを「児童が外界の無生物に対して意識や生命があると考えられる現象」と呼んでいる (波多野, 1996)。それは児童の自己中心性から生じた考えであり、すべての事物は人が作ったものという人工論の考えにも関係していると思われる。しかし、こうしたアニミズム的な考えは子どもに限らず、大人にも存在している。Dennis & Mallinger (1949) は施設老人を対象にアニミズムの質問紙調査を行い、加齢に伴う高いアニミズム生起率を見出している (市川, 1997)。牧野 (1992) は大人に焦点を当て、アニミズム的なイメージの生成を子どもと比較した結果、大人も子ども同様にアニミズム的なイメージを持ちやすいという結果を報告している。また、大人のアニミズムについては、イメージの鮮明さは必ずしも実際にその対象が生物であるか無生物であるかに依存していなかったことを言及している。このことに対して、布施 (2004) は子どもに限らず、大人でも「生きている」や「生物」という言葉に多様な意味を付与している可能性があると言明している。池内 (2010) はこうした成人のアニミズムを「実際に生を認めているわけではないが、無生物に対して神性や生命の存在を感じる現象」と再定義している。このように、大人と子どものアニミズム的思考は発達に伴って質的に変化する

が、アニミズム的イメージをもつことは連続的に存在していると考えられる。

ウィニコット (1953) は移行対象が発達するにつれて、拡散していき、遊び、芸術、宗教などへ変化していくと述べているが、青年期以降も同じぬいぐるみなど素材の柔らかいものを移行対象として使用し続ける理由として、以上で述べたアニミズム的思考が関連していると考えられる。池内 (2007) は人形供養奉納者に対して調査し、“供養したものは所有者にとってどんな存在だったか”，という質問を自由記述で回答を求めた結果、移行対象の役割を担っていたと思われる項目「話し相手、遊び相手、友達のような存在」が最も多く語られ、さらに“なぜ捨てるのではなく供養しようと思ったのか”という質問に対し、「魂、命、霊などが宿っているのだから」という回答が最も多く得られたと報告している。このことから、長期に渡って一緒に過ごしたぬいぐるみやタオル、毛布といった移行対象もまたその人にとって大切な存在であり、たくさんのことを一緒に経験し、年月が経つにつれ、自分にとって一番近い存在となるだろう。喜怒哀楽がすべて伝わるように、「生きている」というような気がするだろう。そのため、成長に伴って移行対象は拡散せず、長く持ち続ける場合があると考えられる。

4. 目 的

青年期には、第二次性徴にともなって内的な変化が起これ、社会的ネットワークの拡大により対人関係における感情のあり方も変化する。その際に移行対象というイメージの世界で擬似的な対人関係の体験を積むことで現実の対人関係の基礎を形作っていると考えられる。しかし、発達に伴った移行対象の研究は少ない。そこで、本研究ではまず青年期以降の人に対し、成人用アニミズム尺度を用いて対象者を調査し、その関連を検討する。まず大学生を対象に「移行対象」、「アニミズム的思考」、「内的作業モデル」の質問紙調査を実施し、その中から移

行対象を持つ人と持たない人に分け、

- ① 移行対象の有無、終了時期、使用状況
- ② 内的作業モデル尺度 (internal working model: IWM) で対人態度を測り、アニミズム尺度を用いてアニミズムの考えと移行対象所持の関連

を明らかにすることを目的とする。

また、本研究では、移行対象を前述した先駆物を除き「幼い頃から持ち続けて、自己を慰める機能をもつ愛着物」と定義して、調査を行った。

5. 方 法

調査対象者

関東の大学2校と関西の短期大学の学生461名に質問紙を配布、最終的に418名 (男性109名、女性309名。平均年齢19.81 ± 1.19歳) が有効回答者となった (有効回答率は90.6%)。

調査期間

2014年9月～12月にかけて、講義終了後に一斉に集団実施し、回収した。

調査内容

インターネットで「大人の移行対象」に当てはまる書き込みを取り上げ、その内容から移行対象の使用状況を整理し、その結果に基づき質問紙を作成、予備調査を行った。予備調査の結果をもとに、青年期以降の移行対象を使用時期と使用状況について、分類を行った。

アニミズム思考に関する質問項目は池内 (2010) が作成した成人用アニミズム尺度を使用し、14項目それぞれについて5件法で回答を求めた。内的作業モデルの質問項目は戸田 (1998) が発表した成人の内的作業モデル尺度を使用し、18項目それぞれに6件法で回答を求めた。

6. 結 果

移行対象の経験の有無と使用時期から、調査対象者を「移行対象経験あり」、「移行対象経験なし」、「移行対象継続」の3群に分けた。なお、

幼い頃に移行対象の経験がなかったが、現在持つことで安心感を得られるような慰めるものを使用していると回答した人は7名いたが、データの数が少なかつたため、今回は分析の対象から外した。従って、本研究の対象者は411名である。

移行対象を経験した人は63% (411名中259名)であり、男子52% (108名中56人)、女子67% (303名中203人)であった。そして、女子の移行対象出現率は男子より、有意に高かったことが見出された ($X^2 = 7.84, df = 1, p < .01$)。そのうち、青年期以降あるいは現在も移行対象を所持し、使用していると回答した人41% (259名中105名)は「移行対象継続」と分類し、男子36% (56名中20人)、女子42% (203名中85人)であった。統計的に検討したところ、有意な差は得られなかった ($X^2 = 0.69, df = 1, n.s.$)。この結果からは、女子の方が移行対象の出現率が男子より高いが、青年期以降も継続して持つということにおいては男女差があるとは

いえない。

また、「移行対象経験あり」群と「移行対象継続」群が具体的に使用した移行対象の項目をそれぞれ表1と表2であらわした。なお、これらのカテゴリーに分類した際、移行対象を複数記入した回答者については各々の項目を1つとして加算している。

表1と表2で示したように、「移行対象あり」群と「移行対象継続」群が最もよく使っていたものは「二次的移行対象」のぬいぐるみであり、その次は「一次的移行対象」のタオルであることがわかった。

「移行対象経験あり」群の人を対象に、移行対象の平均消失年齢について検討した(表3参照)。男女の移行対象の消失時期を統計的に検討した結果、有意な結果は得られなかった ($t = 1.33, df = 151, n.s.$)。よって、本研究における移行対象の平均消失年齢は男女とも6~7歳であることがいえる。

そして、「移行対象経験あり」、「移行対象経

表1. 「移行対象あり」の具体的な内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	84
タオル	44
硬い人形	10
毛布・ブランケット	9
枕	4
布団	3
柔らかい布	3
玩具	1
へびの抜け殻	1
野球ボール	1
野球グローブ	1
カバン	1
合計	162

表2. 「移行対象継続」の具体的な内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	61
タオル	28
毛布・ブランケット	15
枕	4
布団	4
硬い人形	4
野球グローブ	2
玩具	1
キーホルダー	1
野球ボール	1
合計	121

表3. 移行対象の平均消失年齢及び性別 (N = 153)

性別(N)	消失年齢(Y) ± SD
男子(35)	7.34 ± 2.48
女子(118)	6.69 ± 2.59
平均	6.76 ± 2.81

験なし」,「移行対象継続」の3群によってアニミズム的思考に差があるか否かを検討するために、アニミズムの得点を算出した。分析方法は池内(2010)が行った方法に従って、アニミズム尺度の項目を「自然の神格化」,「所有者の分身化」,「所有物の擬人化」の3つの下位尺度に分け、3群から得られたデータを用いて一要因分散分析および多重比較による下位検定を行った(表4)。その結果,「自然物の神格化」($F(2,408) = 3.383, p < .05$),「所有者の分身化」($F(2,408) = 4.051, p < .05$),「所有物の擬人化」($F(2,408) = 23.381, p < .001$)の下位尺度平均得点で有意差が認められた。Ryan's法による多重比較を行ったところ,「自然物の神格化」においては,「移行対象継続」群は「移行対象経験なし」群より有意に平均値が高いことを示した($t = 2.49, df = 408, p < .05$)。すなわち,「移行対象継続」群は「移行対象経験なし」群に比べて,自然物を神格化する傾向が高いことが分かった。

「所有者の分身化」においては,「移行対象経験あり」群は「移行対象経験なし」群より有意

に高く($t = 2.17, df = 408, p < .05$),「移行対象継続」群は「移行対象経験なし」群より有意に高いことがわかった($t = 2.63, df = 408, p < .05$)。すなわち,「移行対象経験あり」群は「移行対象経験なし」群に比べて,また「移行対象継続」群は「移行対象経験なし」群に比べて,モノには作り手や所有者の心が宿していると考えられる傾向が高いことが見出された。

「所有物の擬人化」においては,「移行対象継続」群は「移行対象経験なし」群より有意に高く($t = 6.76, df = 408, p < .05$),また「移行対象経験あり」群よりも有意に高い傾向が認められた($t = 4.86, df = 408, p < .05$)。すなわち,「移行対象継続」群は「移行対象経験あり」群と「移行対象経験なし」群に比べて,所有するモノを擬人化する傾向が高いことがわかった。

移行対象経験と各アニミズム尺度の得点を男女差で検討したところ(表5),「所有者の分身化」において,「移行対象経験あり」群の女性は男性より平均値が有意に高く($t = 2.22, df = 151, p < .05$),「移行対象継続」群の女性は男性より得点の平均値が高いことが統計的に有意と

表4. 移行対象経験とアニミズムの得点平均値と標準偏差

移行対象(N=411)	自然物の神格化	所有者の分身化	所有物の擬人化
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(153)	10.15±2.62	11.01±2.02	15.61±3.93
移行対象経験あり(153)	10.27±2.48	11.50±1.89	16.52±3.69
移行対象継続(105)	10.93±2.30	11.67±1.94	18.86±3.69

表5. 移行対象経験とアニミズム得点の男女差の平均値と標準偏差

アニミズム項目	移行対象経験あり(N=153)		移行対象経験なし(N=153)		移行対象継続(N=105)	
	男性(35)	女性(118)	男性(53)	女性(100)	男性(20)	女性(85)
	M±SD		M±SD		M±SD	
自然物の神格化	10.00±3.18	10.38±2.78	9.59±2.87	10.29±2.96	10.50±3.20	11.26±2.84
所有者の分身化	10.77±2.32	11.68±2.06	10.51±2.52	11.17±2.30	10.85±2.46	12.12±1.99
所有物の擬人化	15.97±3.53	16.75±3.89	15.49±3.45	15.63±4.15	18.45±3.91	18.94±3.50

認められた ($t = 2.45, df = 103, p < .05$)。すなわち、「移行対象経験あり」群と「移行対象継続」群の女性は男性に比べて、モノには心が宿っていると考える傾向が強いことがわかった。

また、IWMの下位尺度ごと（安定尺度、回避尺度、アンビバレント尺度）に分散分析および下位検定を行った（表6）。その結果、回避尺度において有意差がみられた ($F(2,408) = 5.541, p < .005$)。Ryan's法による多重比較を行ったところ、回避尺度において「移行対象経験なし」群は「移行対象経験あり」群よりも平均得点が有意に高いことが示された ($t = 3.10, df = 408, p < .05$)。また、「移行対象継続」群は「移行対象経験あり」群より平均値が有意に高いことがわかった ($t = 2.48, df = 408, p < .05$)。従って、移行対象を経験しなかった人または、移行対象を青年期以降も所持し続ける人は青年期以前所持をやめた人よりも対人様式において回避的な態度を取りやすいことがわかった。

移行対象経験とIWMの下位尺度ごと（安定尺度、回避尺度、アンビバレント尺度）得点の男女差を統計的に見た結果（表7）、「移行対象継続」群はすべての下位尺度において有意とな

らなかった（順に、 $t = 0.681, df = 103, n.s.$; $t = 0.904, df = 103, n.s.$; $t = 0.87, df = 103, n.s.$ ）。しかし、回避尺度において「移行対象経験あり」群の男性は女性より平均得点が有意に高く ($t = 2.5, df = 151, p < .05$)、「移行対象経験なし」群の男性は女性より平均値が有意に高い結果となった ($t = 3.45, df = 151, p < .05$)。すなわち、「移行対象経験あり」群と「移行対象経験なし」群の男性は女性に比べて、対人的回避の態度が取りやすいことがわかった。

また、安定尺度においても、「移行対象なし」群の男性は女性より統計的平均得点が高いことが認められた ($t = 2.14, df = 151, p < .05$)。つまり、「移行対象なし」群の男性は女性に比べて回避的な対人関係を取りつつ、安定的であることがわかった。

7. 考察

7.1 移行対象の出現率と性差

本研究では、移行対象を経験した人は63%（411名中259名）であり、女子の移行対象出現率は男子より有意に高いことが見出された (X^2

表6. 移行対象経験とIWMの得点平均値と標準偏差

移行対象(N=411)	安定尺度	回避尺度	アンビバレント尺度
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(153)	21.10±5.40	19.89±5.16	21.96±4.93
移行対象経験あり(153)	21.29±4.65	18.15±4.57	21.83±5.44
移行対象継続(105)	21.83±5.11	19.69±4.95	22.88±5.31

表7. 移行対象経験とIWM得点の男女差の平均値と標準偏差

IWM項目	移行対象経験あり(N=153)		移行対象経験なし(N=153)		移行対象継続(N=105)	
	男性(35)	女性(118)	男性(53)	女性(100)	男性(20)	女性(85)
	M±SD		M±SD		M±SD	
安定尺度	21.54±4.59	21.33±4.21	22.02±4.85	20.33±4.52	22.65±5.13	21.89±4.30
回避尺度	19.86±4.60	17.85±4.05	21.42±4.86	18.82±4.18	20.55±4.22	19.54±4.55
アンビバレント尺度	21.69±6.05	21.82±5.30	20.94±5.64	22.44±4.55	23.90±4.93	22.80±5.16

= 7.84, $df = 1$, $p < .01$)。この結果に対して、日本における移行対象の出現率は(藤井, 1985; 遠藤, 1990; 中根, 1995; 井原, 1997; 黒川, 1999; 富田, 2007) 平均約30%と低い比率が示されているが、近年において50%前後と増加している傾向が見られている(阿部, 2006; 信田, 2008; 清水, 2012)。本研究で示した結果においても、従来の研究より発現率が上回っている。その要因の一つは森定(1999)が指摘したように、前者が母親を対象に子供の移行対象について調査したのに対し、後者の本人を対象にした調査の方が出現率が高くなるからであると思われる。本人を対象に行った移行対象の出現に関する研究は、Shafii(1986)は80%の出現率を報告し、中根(1994)は54.9%、森定(1999)は62%、信田(2009)は85.5%、清水(2012)は45.6%と報告しており、いずれも高い出現率であることがわかった。

また、母親の中には移行対象に対してネガティブなイメージをもつ母親もいるため、実際のことを答えにくいということも考えられる(森定, 1999)。このことに対して、筆者(2011)は台湾で移行対象の出現率を調査した結果、台湾の母親は移行対象に対して、いい意味合いを持つと好意的に考える母親が多く、その結果68.29%の高い出現率を見出している。また、生育環境から考えると、日本社会の欧米化や共働き、シングルマザーの増加などにより、子どもを早く独立させようとする子育て環境の変化もあげられる(清水, 2012)が、この点に関してはHong(1976)が主張した四つの要因のうちの「身体接触」という要因が影響していると考えられる。働く母親の増加により子どもとの接触時間が減少し、母親が不在がちの子どもはストレスに対処するため移行対象を創造することが求められ、移行対象の出現率が高まる結果に繋がったと考えられる。

また移行対象出現率の性差に関しては、本研究では女子の方が男子より移行対象を持ちやすい結果となった。この結果に関してはShafii(1986)、遠藤(1991)、森定(1999)、山本

(2008)、Erkolahti & Nystrom(2009)、筆者(2011)の研究結果と一致した。その理由は森定(1999)が言及したように、移行対象は母性性の発達を促進する側面があるため、女子のほうが社会的に所持することを許されるという要因のほか、遠藤(1991)は移行対象の慰め機能に注目し、女子の方が生得的な感受性が強いいため、相対的に移行対象への愛着が多く見られるということを指摘している。また、本研究において最もよく使われていた移行対象はぬいぐるみであり、遊びの要素が強いと言われている「二次的移行対象」である。このことも含めて性差について考えると、女子のほうがやわらかいぬいぐるみなどを遊びの対象として与えられやすく、移行対象を持ちやすい環境にあると考えられる。それに対して、森下(2006)は男の子の遊びの精神の核は「戦うこと」と指摘している。女子と男子の育てられ方はそもそも違いがあり、男の子は将来的には社会で戦い、一家を守る役割を果たすため、小さい頃から逞しく育てられ、柔らかくて愛着を湧きやすい移行対象を持つことが許されにくく、ぶつけ合ったり、争ったりする遊びのほうが成立されやすいと思われる。筆者(2011)は異文化要因を挙げ、女子のほうがぬいぐるみを与えられやすい文化にあるため、男子と比べて移行対象の出現率が高くなると言及したが、性的役割意識の違いからも推測することができるとと思われる。

7.2 移行対象の消失

移行対象の出現に関する研究が多かったが、消失についてはあまり検討されていない。Bush(1977)の調査で多くの子供は5~6歳の間に最初の移行対象から卒業すると言及し、中根(2005)が行った移行対象の研究は4~6歳が終止年齢と報告している。犬塚ら(1991)の研究によると、5, 6歳が移行対象消失年齢のピークであるとしている。森定(1999)は移行対象の消失時期として平均6歳とし、その理由は「関心が外界に向いたため」、「親に捨てられた」などをあげている。本研究においても、移

移行対象の消失時期は6～7歳であり、性差の検討では有意な違いは見られなかった。この結果は既存研究と大きな差が見られなかった。すなわち、移行対象の消失時期はおおよそ6歳前後にあることがいえる。移行対象消失の原因は様々な理由が考えられるが、ここでは、消失の年齢における発達段階においての意味から考えることにする。

6歳の子どもはピアジェの発達段階において「前操作期」の第2段階にあたる時期であり、この発達期の特徴としては「自己中心性」や「アニミズム」があげられる（北川，2005；川崎，2000）。「自己中心性」とは、幼児特有の心性であり、自他の未分化、主観と客観の未分化のために、他者の視点からの外界認知が困難であることを指している（小塩，2004）。しかし、6歳の子どもはその後の「具体的操作期」の年齢に近いと見られるため、「脱中心化」の思考が可能になっていく。高田（2010）は4～6歳の幼児を対象に行動観察を行った結果、「他児への関心」は年齢とともに増加し、他者を参照することを通じて、自他の関係や自身のあり方を捉えようとする傾向が幼児後期に伸張し、6歳児が最も多いと示している。また、寺川ら（2011）は5、6歳児に対人葛藤が生じやすい場面を与え、その後の解決過程を観察した結果、6歳児になると共有を可能とする言語能力が発達し、グループとしての共感性や親密性を高めて、対人葛藤が生じやすい問題解決において、より相互交渉をしながら問題解決を図ろうとする傾向があると報告している。すなわち、6歳以降の子どもは前操作期の第1段階の子どもと比べて、言語能力の発達のために、外的世界や他人に対して関心を抱きやすくなり、自他の分化を進めながら、他人と自分の比較をし、自分があるべき振る舞い、姿勢を定めていくと考えられる。このように、子どもは6歳になると外との接触が頻繁になり、今まで移行対象に向けた関心が外的世界へと移行していく。そして、移行対象への愛着は仲間意識へと変化し、仲間たちが持っていない愛着物をもつことに徐々に恥ずかしさ

を感じはじめ、移行対象から卒業するきっかけになったと考えられる。

また、6歳になると幼稚園や保育園を卒園する時期が近くなり、周りの大人も自分も園の中で一番上であることを自覚させるようになる。もうすぐ小学校へ入学することも意識し始めて、心身共に大きく変化を生み出していく時期になる。この時期の子どもは認知能力をはじめ、自制心、辛抱強さや粘り強さ、落ち着きといった行動や感情面の自立がそれまで以上に要求されるようになる（岩田，1997）。今まで子どもが肌身から離さなかったぬいぐるみや毛布、タオルは小学生に入る前に「何とかしなきゃ」と親からの外圧により移行対象と距離を取ることを意識させられ、待ち切れなかった親は止めさせるために取り上げていくといった行動をとる。このような外的環境の変化により移行対象の消失現象と繋がる結果になったと考えられる。

しかし、本研究では青年期以降あるいは現在も移行対象を所持し、使用しているという「移行対象継続」群の人は41%であった。また、男女の差が見出されなかった。よって、児童期以降も移行対象を所持し続ける人が存在することがわかった。その長く持ち続ける理由について以下で触れていきたいと思う。

7.3 移行対象とアニミズム

「移行対象」という言葉を作ったウィニコットが生まれた国、イギリスはファンタジーを大事にしている国と知らされている。ポッター（Potter）の『ピーターラビット』が生まれた国であり、トールキン（Tolkien）の『指輪物語』を生んだ国である（井原，2009）。また、近年話題になった、J・K・ローリング（J. K. Rowling）の「ハリーポッターシリーズ」もイギリスで作られた。これらはいずれも大人のファンタジーを活用し、アニミズム的な考えを積極的に取り入れている。ウィニコットの理論と実践はこうした心理療法的環境や文学的風土を背景として醸成されたものである（井原，

2009)。すなわち、ウィニコットの考えを理解するため、こうしたイメージを遊ぶ心を持つことが必要であり、アニミズム的な思考に親しむことも大切だろう。

日本においても、ものには魂が込められていると考えられていたり、山や大木に神様が宿っていると考えられている。阿部（2002）によると、日本文化の伝統的な自然観は、アニミズム的であるとしている。池内（2010）は、その背景には日本の伝統宗教である神道の存在が大きいという。つまり、日本もイギリスと同じようにアニミズム的思考の背景があり、こうした考えを持ちやすいと考えられる。またすでに述べたように、大人と子どものアニミズム的なイメージが質的に異なるが、その思考様式の間は連続性をもっている（市川，1977；布施，2004；牧野，1992）。小さい頃に遊び相手としてきた移行対象を子どもが大人になると「生きている」という「感じ」がするようになる。長い間使いこなししたモノには愛着があり、容易には捨てるがたい（松崎，2004）。しかし、それは単にものに命を感じやすいという考えからだけではなく、それぞれの発達段階において不安や寂しさを感じやすい時期に相方として共に過ごしたことにも意味があると思われる。

本研究では、「移行対象継続」群の人は「移行対象経験なし」群の人よりアニミズムの考えが強く、モノを擬人化する傾向が特に強かった。アニミズム的な考えは、移行対象を経験しなかった人も持っているが、青年期以降も移行対象を持ち続ける人はモノに「生」や「命」を感じやすく、アニミズム的思考が特に強いといえる。Warren & Ostrom（1988）は、物を捨てられず、ため込んでしまう人のことを「ホーダー」とし、ホーダーがものを捨てられない理由はモノを人のようにみなす「人格化」傾向が強いからであると言及している。アニミズムの尺度において、他の結果と合わせてみても、「移行対象経験あり」群の人は「移行対象経験なし」群の人よりもモノには所有者や作り手の心が宿っている（分身化）と感じやすいが、自

分自身が所有しているモノを擬人化する傾向は「移行対象継続」群の人より弱いという結果が出た。つまり、移行対象を経験した人は移行対象を経験しなかった人よりもアニミズムの考えが強いが、青年期以降も移行対象を使用する人よりモノに対して距離を取っていることがわかった。この結果に関して、池内（2010）によると「ものを擬人化しやすい人ほど、ものに感情移入しやすいから、それらを捨てることへの抵抗感が強い」としている。すなわち、「移行対象継続」群の人はモノを擬人化しやすいため、移行対象に感情移入しやすく、捨てることに抵抗があり、結果的に長く持つことになると考えられる。一方、信田（2009）は、移行対象から卒業でき、移行対象を意識化出来たということは、自他の分離・分化が出来ており、対象として距離を置いて見れるということであると言及したように、「移行対象あり」群の人は「移行対象継続」群と同じくアニミズム的な考えをもつが、移行対象から卒業した経験を通して、モノを対象化し、自分と距離をとることができるようになり、擬人化する傾向が相対的に弱くなっていったと考えられる。

「所有者の分身化」において、「移行対象経験あり」と「移行対象継続」の女子が男子よりその傾向が強かったことがわかった。アニミズム的思考は女性のほう強いという結果は市川（1977）、大元・秋山（1988）、池内（2010）の調査と一致する。松崎（2004）によると、昭和50～60年代にかけては空前の「おまじないブーム」が起き、多くの子どもたちが何らかの指針を占いに求めた。また、その身の回りのモノに精霊の存在を認める思考は、昔も今もそう変わりはなく、大塚（1989）によると、そこには少女達のモノに対するアニミズム的思考が見出せる。女性のアニミズム的思考は昔から存在し、社会にも大きく影響していることがわかる。そうした要因は、女性のほうが男性より宗教に対する肯定的な態度をもっている（池内，2010）とも考えられる。また、移行対象の経験も踏まえて検討すると、女子は生得的に感受性が男子より

も強く、移行対象を使用した経験によって母性発達側面を促進され、モノに「こころ」を感じやすく、愛着を持ちやすいことも考えられる。

池内（2014）によると、アニミズム的思考の強い人はホールディング傾向も強いと見出されている。今回の結果を言い換えると、アニミズム思考が強い人は移行対象を長く持ちやすいとも考えられる。この結果から本研究の仮説「青年期以降も同じ移行対象を使用し、拡散しない理由として、アニミズム的思考が関連していると考えられる」を支持したとも言える。しかし、長く持ち続けることについて、アニミズム的思考だけでなく、青年期以降の移行対象を使用について、新たな課題として今後さまざまな方法で検討していく必要がある。

7.4 移行対象とIWM

青年期は、アイデンティティを確立していく重要な時期であり、そのため心理的に混乱しやすく、精神的に不安定になりやすい時期である（藤村ら，2000；遠藤，2000；笠原：1976）。この時期の青年は第二の「分離—個体化」という親離れを経験し、人間関係を友人へと広げていく。青年は友人関係を築く中で自己と言えるものを見出していく（松下ら，2007）。

しかし、近年スマートフォンの普及により、インターネットが身近になったため、手軽に人とコミュニケーションが取れるようになり、時間をかけずに能率よく人と関わることができるようになった。遠藤（2000）は、青年は社会性の発達途上にあり、その強烈な自己意識のために現実の人間関係を築くのが苦手な傾向にあると指摘している。また、水野（2004）は現代青年の友人関係が全般的に表面的になっていると述べたうえで、「表面的」とは、お互いの心の深みには立ち入らないことと指摘している。すなわち、従来青年期において、親から自立し、仲間と親密な関係を築いていく重要な段階であるが、この時期の青年は社会における自己のあり方についてまだ模索中であり、そこに電子機器の進歩が助長し、人間関係の形成は以前と比

べて広く浅くなり、表面的になったと考えられる。また、遠藤（2000）によると、青年期の若者が「やさしく」なり、他者を求めすぎて相手を傷つけることがないように、付き合い方が淡泊になったとしている。この点に関して、千石（1988）は「心を打ち明けない」という新しいタイプの人間関係に言及し、それは、心はやさしいがお互いに傷つくことを恐れている傾向であると述べている。従って、青年はお互いに傷つくことのないように、人と距離を取りながら関わるという「回避」的な関わり方をしていると考えられる。

本研究において、移行対象を経験しなかった人は移行対象を経験した人と比べて、対人的回避傾向が見出された。前述したように、そもそも青年期の人は対人的に回避する態度を持ちながら、内的に安定していくという対人的関わりを持っているのであれば、移行対象の経験は青年期において、どのような意味があるのだろうか。ウニコット（1953）は、移行対象は「ほどよい」母子関係を基に発生し、殆どの子どもが経験するものと主張している。その後、多くの研究者がこの発想を基に、実証的な研究を重ねた。移行対象が欠如した場合に、母子関係の歪みと子の健全な情緒発達からの偏倚を読み取れることが多い、という見解が多くの研究結果によって支持されている（遠藤，1989）。牛島（1982）は、過渡対象（移行対象）は母子関係が希薄である場合と濃密である場合に発現しにくいという。阿部（2006）は移行対象の経験が青年期の自己愛傾向との関連について調査し、移行対象を経験しなかった人は青年期において利己性傾向が高いという結果を見出した。その理由は、そういう人たちの母親が常に要求を満たしてくれたため、本来幼児期に脱却すべき万能感から十分に抜け出せずに成長したと示唆している。この点に関して、町沢（1998）は母子密着が強くなり、赤ん坊のときのような全能感が壊されることなく成長することが自己愛的な青年の増加に繋がると指摘し、その自己愛的な青年の特徴について、人と深くかかわると自分

が傷つくことがわかっているから、人と深くかかわることを避ける点をあげている。すなわち、移行対象を経験しなかった人は幼児期において、母親との関係が必要以上に濃密であったため、万能感から脱出することができず、青年期になっても他人より自分の利益を追求し、自分に関心を向けやすく、自己愛的になりやすい。その結果、人と深く関わることを避け、対人的回避となると考えられる。

一方、Lundy & Potts (1987) は移行対象の回想は温かい対人関係を築こうとする「親密性」と関係があると述べており、移行対象の経験の有無は、その後の対人関係において暖かな関係を築こうとする基本の体験となるとしている。つまり、移行対象を経験した人は、親密な関係の体験を思い出すことができ、それが現実の人間関係にもいい影響をもたらしている。また、藤巻 (2005) は大学生を対象に調査を行った結果、乳幼児期において、移行対象を所持していた者は、母子関係が希薄で移行対象がない者よりも有意に青年期の友人関係の確立が良好であると報告している。井原 (2006) は高校生とその保護者を対象とした回顧的な調査でも、移行対象を持っていた人の方が、Y-G性格検査における社会的外向性の得点が高く、対人的に積極的であると指摘している。以上から、小塩 (2004) によると、青年期には他の時期よりも自己愛的な心性が顕著に見られ、さらに現代青年は以前に比べて自己愛的になってきている。また、現代の青年は友人との間に距離をおき、友人との親密な付き合いを回避する傾向がみられるが、移行対象を経験した人は「ほどよい」母子関係を経験したため、経験しなかった人より自己愛、自己中心的な傾向が低く、より親密的かつ安定した対人関係を築くことができると考えられる。

しかし、本研究において、移行対象を青年期以降も持ち続ける人は青年期以前に所持をやめた人よりも対人的に回避する傾向が見られた。この結果に関しては、本研究で見出された「移行対象継続群の人はアニミズム的思考が強

く、擬人化する考えが特に強い」という結果と合わせて考えていきたい。池内 (2014) によると、モノを分身化、擬人化することは、頭の中でモノに生命を吹き込むことを意味する、またはそうした人たちにとって、モノは時にかげえのない家族であったり、大切な友人であったりすると述べている。井原ら (2006) は成人に回顧的調査を行ったところ、ぬいぐるみなど二次的移行対象を「友達や兄弟」といった「人格をもったもの」として扱う傾向があり、一次的移行対象よりも守り手、話し相手のな人格要因が強いと言及している。さらに、Stevenson (1954) は一次から二次に発達するにつれ、対象は人格化され、人間的な感情を投影するようになる」と論じている。このように、「移行対象継続」群の人は移行対象を単純にモノとして持ち続けるのではなく、仲間や友人として扱っていることが考えられる。そうした移行対象は現実的な友達よりも自分の気持ちを理解してくれて、すべて受け止めてくれる対象となり、時によって現実の友達の代わりになる存在となる。そして、常にそばにいてくれて、慰めてくれる相手がいるため、現実での対人的な態度は積極性が低く、回避的な関わり方に繋がったと考えられる。しかし、「移行対象経験なし」群の人は自己愛的で回避する対人態度を取っていることについて、小塩 (2004) は「広く浅いつきあい方」は自己愛傾向のうち特に「注目・賞賛欲求」が強いことを示し、自分自身に対する肯定的評価が崩れてしまう可能性が高くなるような深い対人関係を回避して広く浅く表面的に付き合うことを示唆している。それに対して、「移行対象継続」群の回避的な対人態度は、内的な対象との関わりが十分であるため、外的な環境との関わりが薄くなる結果となった。藤巻 (2005) は、二次的移行対象が、青年期における友人関係の確立に肯定的な影響を及ぼすと見出している。また、井原ら (2006) は移行対象とのかかわりが、対人関係のシュミレーションやイメージする力を発揮する機会になると推測しているように、移行対象を経験しなかった人

との「回避」とは質的に違うことをここで再確認する必要があると思われる。

移行対象の経験とIWMの得点における性差の違いについては、男子のほうが女子より回避的な態度を取りやすいことがわかった。すでに述べたように、現代の青年は対人的に回避する態度を取りながら、内的に安定していくという対人的な関わり方の傾向がある。今回の結果においても、男子は女子より回避的、安定的な対人態度を取っていることを示していた。青年期はそうした対人的距離を調整しながら、内的に安定化していくと推測できる。また、藤村ら(2000)は女性のアイデンティティ形成には、他者との親密な関係が重要であると言及し、男性のアイデンティティ形成においては「個人内領域」が重要であり、女性の場合は「対人関係領域」が重要であると指摘している。このことから、男子は社会的地位、他人との比較、競争(藤村ら、2000)によってアイデンティティを形成していくのに対し、女子は他人との関わりや愛着といった親密的な対人関係の中でアイデンティティが確立されていく。従って、青年期の女子は男子より他人との関わりが頻繁になり、より親近的な対人関係を求める傾向があると考えられる。

結びにかえて

松下ら(2007)によると、現代青年は、山アラシ・ジレンマから逃がれるため、相手にしがみつき執着し、相手の動きをうかがい、関わりそのものを避けて相手と隔たりを置く、といった対処がなされるとしているが、友人関係の“希薄さ”が背後にあり、親密性を希求しながらも、自己や他者との関係の揺らぎを避けるためにバランスをとろうとする心的な動きを示唆している。青年期は社会的ネットワークの拡大により、心理的に混乱しやすい状態にある。その上に、親離れやアイデンティティの獲得など、様々な人生の課題が迫ってくる。そうした

状況にいる青年は心細さを感じやすく、何かと繋がりたい気持ちになりやすい。しかし、うまく自己表現できない人は、結果的に不登校、アパシー、ひきこもりなど社会不適応な症状として表面化していく。

移行対象は現実世界と内的世界の橋渡しであり、中間領域に存在し、慰め機能をもっている。この慰める母性的な要素は、心を支える基礎となり、人生の節目の時期、不安に陥った時、慰める存在を中核とした中間領域に立ち戻ることによって、外的現実と内的現実をすり合わせるストレスからしばし離れ、ホッと一息ついてエネルギーを貯えることができる(森定, 2001)存在である。児童期を過ぎても、人生において多くの失敗や挫折の試練を経験する機会があるが、そうした時に一次的な退行ができ、休憩地とする領域が存在することによって心強く感じさせ、前に進む勇気を与えてくれると思われる。

本研究は、今まであまり探求されていない青年期以降の移行対象について、アニミズム思考と対人的な態度の側面から検討することができた。しかし、青年期以降も移行対象を使用し続ける理由の実証的な検証ができなかった。今後、実際に青年期以降の人を対象にインタビュー調査を行い、移行対象の使用状況とその意味や機能の変化などを明らかにしていく必要があると思われる。また、青年期以降も移行対象を使用することを精神病理と関連つけて考えられることが多いが、狭義的に成人の移行対象は別の意味を持っている可能性があると思われる。オーストラリアの臨床研究においては、移行対象の慰め機能を肯定的に評価し、痴呆症ケアに人形治療を取り入れた結果、生活が改善された事例を報告している(芹澤, 2000)。このように、青年期以降の移行対象を明らかにしていくことは、将来的に臨床現場に新たな領域を広げることを期待できるであろう。

参考文献

- Arthern J, Madill A. (2002). How do transitional objects work? The client's view. *Psychotherapy Research*, 12(3), 369-388.
- Busch F. (1977). Theme and variation in the development of the first transitional object. *The International Journal of Psychoanalysis*, 58(4), 479-486.
- 阿部哲郎 (2006). 乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響 法政大学大学院紀要, 56, 281-282.
- 阿部 一 (2002). 現代日本文学に見られるアニミズム的自然観の位相空間モデル 東洋学園大学紀要, 10, 138-148.
- Bowlby J. (1969). *Attachment and Loss, Vol. 1*. New York: Basic Books. 黒田実朗・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1991). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社
- Erkolahti R, Nystrom M. (2009). The prevalence of transitional object use in adolescence: is there a connection between the existence of a transitional object and depressive symptoms? *European Child & Adolescent Psychiatry*, 18(7), 400-406.
- 枝井栄利子・守屋英子 (2014). 思春期における自立の支えとなるもの—マンガ・アニメ・ゲーム等にハマるといふ観点から— 茨城大学教育実践研究, 33, 185-199.
- 遠藤利彦 (1989). 移行対象に関する理論的考察—特にその発現の機序をめぐって 東京大学教育学部紀要, 29, 229-241.
- 遠藤利彦 (1990). 移行対象の発生因の解明—移行対象と母性的関わり— 発達心理学研究, 1(1), 59-69.
- 遠藤利彦 (1991). 移行対象と母子間ストレス 東京大学教育学部紀要, 39, 243-252.
- 遠藤由美 (2000). 青年の心理—ゆれ動く時代を生きる— サイエンス社
- Gadini R, Gadini E. (1970). Transitional objects and the process of individuation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 9, 347-365.
- Hong KM, Townes BD (1976). Infant's attachment to inanimate objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.
- Hong KM. (1978). The transitional phenomena: A theoretical integration. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 33, 47-79.
- Horton PC. (1981). *Solace: The Missing Dimension in Psychiatry*. The University of Chicago Press. 児玉憲典訳 (1985). 移行対象の理論と臨床—ぬいぐるみから大洋体験へ 金鋼出版
- 波多野完治 (1996). ピアジェの児童心理学 国土社
- 藤井京子 (1985). 移行対象の使用に関する発達の研究 教育心理学研究, 33, 106-114.
- 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿編 (2000). 青年期以降の発達心理学—自分らしく生き、老いるために 北大路書房
- 布施光代 (2004). 生物概念と生命概念の階層構造 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 215-222.
- 藤巻英徳 (2005). 乳幼児期の移行対象と青年期における自立 法政大学大学院人間社会研究科紀要, 54, 346.
- 井原成男・木村涼子 (1986). 移行対象の発達の意味—移行対象がさまざまな現れ方をした3症例からの検討 小児の精神と神経, 26, 57-63.
- 井原成男 (1996). ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待 日本小児医事出版社
- 井原成男・汪 玲・庄司順一 (1997). 移行対象と気質の日中比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 170.
- 井原成男・橋爪千恵子・日浅美由紀・森定美也子・吉野美緒 (2006). 移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学 岩崎学術出版
- 井原成男 (2009) ウニコットと移行対象の発達心理学 福村出版
- 市川千秋 (1977). 老人のアニミズムに関する研究 三重大学教育学部研究紀要, 28, 57-61.
- 岩田純一 (1997). 5歳と6歳：こっちの世界への別れ・あっちの世界への希望 発達, 70(18), 34-41.
- 池内裕美・藤原武弘 (1999). 移行対象に関する実証的研究：なぜ、赤ちゃんは毛布を持つと泣き止むのか？ 日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会発表論文集, 108-109.
- 池内裕美・藤原武弘 (2004). 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から 社会心理学研究, 19, 184-194.
- 池内裕美 (2007). モノを人格化する心理—人は人

- 形供養に何を求めるのか— 日本社会心理学
会第48回大会発表論文集, 532-533.
- 池内裕美 (2010). 成人のアニミズム的思考: 自発
的喪失としてのモノ供養の心理 社会心理学
研究, 25(3), 167-177.
- 池内裕美 (2014). 人はなぜモノを溜め込むのか:
ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムと
の関連性検討 社会心理学研究, 30(2), 86-
98.
- 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 (1990). 想像上の
仲間—文献の展望— 精神科治療学, 5(11),
1435-1444.
- 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 (1991). 想像上の
仲間に関する調査研究 児童青年精神医学と
その近接領域, 32(1), 32-48.
- 石谷真一 (2005). 想像の仲間についての深層心理
学的考察 神戸女学院大学論集, 52(2), 103-
123.
- Keith NC, James AC. (1984). Transitional object
attachments in early childhood and personality
characteristics in later life. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 46, 106-
111.
- 笠原 嘉 (1976). 今日の青年期精神病理像 笠原
嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) (1976) 青年
の精神病理1 弘文堂
- 川崎勝義 (2000). 子どもの見方は自己中心的—ピ
アジェの心理学 古川聡 (編) (2000) 教職
に活かす教育心理 福村出版 pp29-36.
- 久保田力 (2008). アニミズム発生論理再考—「霊
魂」の人類学的思想史 (1) タイラー— 東
北芸術工科大学紀要, 15, 80-99.
- 黒川嘉子 (1999). 幼児の就眠時行動の心理学的考
察—狭義の移行対象論から自己調節論へと視
点をうつして 京都大学大学院紀要, 45,
342-352.
- 駒田閑子・別府 哲・宮本正一 (2001). 幼児にお
ける移行対象と愛着の発達 岐阜大学教育学
部研究報告, 50(1), 101-112.
- 北川歳昭 (2005). 発達段階と発達課題 平山論・
鈴木隆男 (編) (2005) 発達心理学の基礎 I
ライフサイクル ミネルヴァ書房 pp63-67.
- Lundy A, Potts T (1987). Recollection of a
transitional object and needs for intimacy and
affiliation in adolescents. *Psychological
Reports*, 60, 767-773.
- 町沢静夫 (1998). 現代人の心にひそむ「自己中心
性」の病理 双葉社
- 松崎憲三 (2004). 現代供養論考: ヒト・モノ・動
植物の慰霊 慶友社
- 松下姫歌・吉田美悠紀 (2007). 現代青年の友人関
係における“希薄さ”の質的側面 広島大学
大学院教育学研究科紀要, 56(3), 161-169.
- 水野将樹 (2004). 青年は信頼できる友人との関係
をどのように捉えているのか—グランデッ
ド・セオリー・アプローチによる仮説モデル
の生成— 教育心理学研究, 52, 170-185.
- 牧野圭子 (1992). 大人におけるアニミズム的イ
メージの持ちやすさについて 日本教育心理
学会総会発表論文集34, 70.
- 森定美也子 (1999). 乳幼児期から青年期までの移
行対象と慰める存在 心理臨床学研究, 16,
582-591.
- 森定美也子 (2001). 思春期における慰める存在—
移行対象の観点から 19(5), 535-541.
- 森下みさ子 (2006). 児童学からの出発: 現代おも
ちゃと子どもの世界の文法(その一): 性差(セ
クシャリティ) / 仮想現実(ヴァーチャルリ
アリティ) / 感受性(センシティブティ)
幼児の教育, 105(7), 40-48.
- 森下正康・三原まどか (2015). 親しい人との愛着
関係が対人不安に与える影響: 内的作業モ
デルと自己受容を媒介として 発達教育研究:
京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後
期課程研究紀要, 9, 31-42.
- 中根淑子 (1994). 移行対象経験と青年期の母親イ
メージとの関係 日本教育心理学会総会 発
表論文集, 36, 97.
- 中根淑子 (1995). 移行対象経験とその後の発達 日
本教育心理学会総会発表論文集, 37, 481.
- 信田 敦 (2009). 移行対象・移行現象からみる大
学生における分離不安に関する研究 心理相
談センター年報 4, 21-28.
- 西山哲治 (1918). 人形病院及人形供養 婦人と子
ども, 18(10), 369-374.
- 岡崎博子 (1983). ある登校拒否女子中学生にみら
れた過渡対象 奈良女子大学教育学年報, 2,
55-66.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシ
ヤ出版
- 小幡 壮 (2003). ダジャワンのアニミズム世界 国
際関係・比較文化研究, 1(2), 201-218.
- 大元 誠・秋山 弥 (1988). 「感」的認識として
みたアニミズムに関する発達的研究 佐賀大

- 学教育学部研究論文集, 35(2), 59-69.
- Stevenson O. (1954). The first treasured possession. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.
- Shafii T. (1986). The prevalence and use of transitional objects: a study of 230 adolescents. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 25, 805-808.
- 千石 保 (1985). 現代若者論：ポスト・モラトリアムへの模索 弘文堂
- 芹澤隆子 (2000). オーストラリアの痴呆症ケア作業療法ジャーナル, 34(5), 603-606.
- 富田昌平 (2007). 乳幼児の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究 中国学園紀要, 6, 127-138.
- 田中宣一 (2006). 供養のこころと願掛けのかたち 小学館
- 戸田弘二 (1998). 内的作業モデル尺度 堀洋道・山本真理子・松井豊 (編) (1994) 心理尺度ファイル—人間と社会を測る— 垣内出版 pp109-114.
- 高田利武 (2010). 日本人幼児の社会的比較：行動観察による検討 発達心理学研究, 21(1), 36-45.
- 寺川志奈子・田丸敏高・石田 開・小林勝年・小枝達也 (2011). 5, 6歳児のピア関係の成熟度が分配行動に及ぼす効果：「保育的観察」によるグループにおける社会的相互交渉プロセスの検討 発達心理学研究, 22(3), 274-285.
- 内田利宏 (2014). 内的作業モデルの児童期から青年期における変容—重要な他者という観点から— 京都教育大学紀要, 125, 117-130.
- 牛島定信 (1982). 過渡対象をめぐる 精神分析研究, 26(1), 1-19.
- 牛島定信 (1992). 思春期の対象関係論 金鋼出版
- Winnicott DW. (1953). Transitional objects and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97. 北山修監訳 (2005). 小児医学から精神分析へウィニコット臨床論文集 岩崎学術出版社
- Winnicott DW. (1964). Further thoughts on babies as persons. In *The child, the family and the outside world*. Penguin Books. 猪股丈二訳 (1985). 子どもと家族とまわりの世界—赤ちゃんはなぜなくの、子どもはなぜ遊ぶの 星和書店
- Winnicott DW. (1971). Transitional objects and transitional phenomena. In *Playing and Reality*. London: Tavistock, 1971, pp. 1-25. 橋本雅雄訳 (1979). 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社 1-35.
- Warren LW, Ostrom JC. (1988). *Pack rats: World class savers*. *Psychology Today*, 22, 58-62.
- 王 怡今 (2011). 台湾における移行対象の出現・消失に関する研究：生育環境の視点から 東京国際大学臨床心理学研究科修士論文 (未刊).
- 若林明彦 (2003). 環境思想における倫理的アプローチとエトスからのアプローチ 宗教研究, 77(3), 703-725.
- 山本美知子 (2008). 移行対象が青年期の友人関係に及ぼす影響 桜美林大学大学院心理学研究科修士論文要旨 (未刊).
- 山岡有沙・米倉五郎 (2011). 過渡対象の視点からみた思春期臨床 愛知淑徳大学論集 創刊号, 103-116.